

カトゥルスの難読箇所について
— Catull. 25. 5 —

大芝芳弘

カトゥルスの難読箇所のうち、25. 5を取り上げ、そのままでは意味をなさない写本伝承に対する従来の修正提案の幾つかを検討するとともに、この第25歌全体の趣旨との整合性をも考慮した上でどのような読みが妥当かを考察したい。

Catull. 25

Cinaede Thalle, mollior cuniculi capillo
vel anseris medullula vel imula oricilla
vel pene languido senis situque araneoso,
idemque, Thalle, turbida rapacior procella,
cum diva † mulier aries † ostendit oscitantes, 5
remitte pallium mihi meum, quod involasti,
sudariumque Saetabum catagraphosque Thynos,
inepte, quae palam soles habere tamquam avita.
quae nunc tuis ab unguibus reglutina et remitte,
ne laneum latusculum manusque mollicellas 10
inusta turpiter tibi conscribilent flagella,
et insolenter aestues, velut minuta magno
deprensa navis in mari, vesaniente vento.

5 diva *V* : luna *Heyse*, laeva *Ellis*, dives *Skutsch* mulier aries *O*
(ml'raries *O*, ml' raries *O'*), mulier alies *G*, mulier alios s.s. aries *G'*, mulier aves
R, al. aries vl. alios *R*² : munerarios *Lachmann (Ellis)*, mulierarios *Haupt*
(*Herzog, Colin et al.*), balnearios *Riese*, numularios *Slater (nummu-Thomson)*,
vestiarios *Lafaye*, Murcia aridos *Putnam*, Murcia arbitros *KacKay (Quinn)*,
arca rimulas *Skutsch (Goold)*, mulier alites *Vuertheim (Wuensch et al.)*,
mulierum arias *Oksala*, miluorum aves *Palmer (Lee)*, milue, areis *Richmond*
ostendit *Rmg*, ostendet *V* : offendit *B. Guarinus (Ellis, Granarolo et al.)*,
tetendit *Herzog*, intendit *Colin*
13 conscribilent *V* (flagella conscribillent *edd.*, conscribilent flagella *Turnebus*)

陰間のタッルス、小兎の毛よりも、
また鷺鳥の綿毛より、また耳たぶの先よりも、
また老人の萎びた一物や蜘蛛の巣よりも柔らかく、
それでいて、激しい嵐よりももっと略奪的なタッルスよ——
それは†・……・†が欠伸しているのを指し示す時のことだが—— 5
私に返せ、お前が鷺掴みに掠め取った私の外套を、
またサエタビスの手拭いとビーテューニアの綾織りを、

愚か者め、お前が父祖伝来の物よろしくいつも見せびらかす品々だ。
 それらを今度ばかりはお前の爪から引き剥がして返せ、
 お前のその羊毛のような横腹と柔らかい両手に
 鞭で醜い焼き入れを殴り書きされることのないように、
 そしてひどくもがき苦しむ羽目にならぬように——まるで
 荒れ狂う風の中、大海に囚われた小舟のように。

10

タッルスという *cinaedus* (男色の女役、陰間、稚児ということであろう) が、陰間らしく軟弱な反面で、いざ物を盗む時には荒々しく略奪的になるという対比を軸に、詩人から掠め取った品物を返さねばひどい処罰を受けることになるぞ、という脅しで締め括る詩である。全体は陰間としての *mollitia* と盗みの *rapacitas* の対照性を比較や類比によって具象的に語りつつ、盗品を返さない場合にタッルスが受けることになる処罰をやはり *mollitia* と *rapacitas* の様を反映するイメージで語った詩であり、事柄の具体的な事実関係よりも、むしろこのイメージ性を際立たせ、またとりわけ音の響きに工夫を凝らして構成した詩だと言えよう。イメージ性とは、例えば冒頭からタッルスの *mollitia* が「小兔の毛」から「蜘蛛の巣」に至る一連の「柔らかな」事物との比較によって、またその *rapacitas* は嵐との比較によって語られ、さらに結末部分でもタッルスの柔肌に打ち付けられる鞭の傷の様や、苦痛にのたうつ様子が嵐の海に翻弄される小舟に準えられている点に見出せよう。柔肌と鞭、小舟と嵐の海の対照性が、前半の *mollitia* と *rapacitas* を語るイメージを受け継ぎ、それに対応していることは明らかであろう。また音の響きの点では、*alliteration* や *homoeoteleuton* など類似の音の連鎖による効果を最大限に狙った詩であることが容易に見て取れる。さらには韻律の点でも周到な配慮と工夫が凝らされていることが分かる⁽¹⁾。

(1) 具体的には、まず *alliteration* は、1 *cinaede ... cuniculi capillo*, 3 *senis situque*, 4 *Thalle turbida*, 5 *ostendit oscitantes*, 6 *mihi meum*, 7 *sudariumque Saetabum*, 9 *reglutina ... remitte*, 10 *laneum latusculum*, *manusque mollicellas*, 11 *turpiter tibi*, 12 *minuta magno*, 13 *vesaniente vento* に見出される。また指小辞形あるいはそれと類似の語形となる語が繰り返されている点が注目される。例えば、タッルスの *mollitia* を語る際には *-alle -olli- -uli -illo -ullula -ula -illa* などの指小形の語尾を様々な母音と組み合わせた単語を積み重ね、しかもそれらと類似した語尾を持つ *procella* という語を用いてその *rapacitas* を語るという工夫も施されている(4行目)。同様の効果は最後の処罰を語る 10 *-culum*, (m)*olli-(c)ella*, 11 (flag)*-ella*, [(scrib)-ille-] などにまで引き継がれる。中でも特に様々な母音と組み合わせられた *-ll-* の形(1 *Thalle*, *mollior*, *capillo*, 2 *medullula*, *oricilla*, 4 *Thalle*, *procella*, 6 *pallium*, 10 *mollicellas*, 11 *flagella* [, *conscribillent*]) が頻出する点が特徴的である。また 2-3 *vel ... vel ... / vel* の *anaphora*, 1 *Cinaede Thalle*, 2 *medullula ... imula oricilla*, 3 *languido ... araneoso*, 4 *turbida ... procella*, 6 *pallium ... meum*, 7 *sudarium ... Saetabum*, *catagraphos ... Thynos*, 10 *laneum latusculum* の *homoeoteleuton* のほか、5 *ostendit oscitantes*, 8 *palam ... tamqu(am)*, 9 *nunc ... ungu-*, 10 *latusculum ... manusque* など類似した音の連続、とりわけ 13 行目では *deprensa navis ... vesaniente vento* と、*-ensan(a)-*, *-esan(i)-* に続いて最後の締めくくりには *-ente ... -ento* が上述の *ve-*, *ve-* の *alliteration* と組み合わせられて

構成としては、最初の5行目までは *mollior* でありながら時として *rapacior* になるタッルスへの呼びかけであり、6-8行は奪い取った詩人の品物を返せとの命令、最後の9-13行では返さなければ柔肌に鞭を浴びせるぞという脅しが語られる。だが、語られている事柄の事実関係を理解する上で問題となるのは、5 *ostendit* を過去の一時点を指す完了または歴史的現在と取るか、一般的・習慣的な行為を語る現在または完了形と解するか⁽²⁾、8 *soles* は詩人の持ち物を盗んで以降に限ったタッルスの行動を指すのか否か、9 *nunc* 「今」とはどのような意味で言われているのか、という点である。まず5 *ostendit* に関しては、次行の *involasti* と同じ時点、即ち実際に詩人の所有物を盗んだ特定の時点を取るとすることも不可能ではない。しかし、5行目までで *Thalle, mollior ... idemque ... rapacior ..., cum ... ostendit ...* と語られるタッルスのあり方は、単に彼が過去の一時点で示した性質というよりも、むしろ常日頃の性格と考える方が妥当であろう。*mollior* との比較に様々な事物が列挙されている点や *ostendit* の目的語が *oscitantes* という複数形であることもそれを示唆する。8 *soles* もそうした習慣的行動を強く印象づける。この語は、この文脈ではタッルスが詩人の品を盗んで以来、度々それらを悪びれもせずに見せびらかしていることを語っている。しかし、それは詩人の品を盗んだ今回にだけ限った行動というよりも、むしろタッルスの常日頃からの盗癖と盗んだ後の大胆な露悪ぶりの具体的な現れとして語られていると見るべきだろう(8 *inepte* という呼びかけは、まさに常識外れな性癖を持つ人間を指す)。これは言うまでもなく、冒頭からの *mollior ... rapacior* が彼の普段の性格を語るものと見る解釈に繋がる。それに対して9 *nunc* は、そうした彼の常習的行動との対比において語られていると思われる。しかし、仮に *ostendit* を詩人の品を盗んだ特定の一時点を指す言葉と解すると、その後タッルスは度々その盗品を見せびらかしていたのに詩人は何も言わず、今になってその返還を要求していることになり、*nunc* が指す時点が不明確なままになってしまい、奇妙である。敢えて言えば、これまではタッルスが見せびらかす品が自分のものとは気付かなかったか確認できなかったが、何らかのきっかけでそれが明確になったので、「さあ今や」返せ、と言っていると想像できるかもしれないが、それを示唆する事情が明瞭に語られているわけではない。それよりもむしろ、上記の解釈に従えば、これまでは彼の盗みを黙認してきたが「今回は」盗まれた物が特別な品物だから返せ、という意味に理解できるだろう。第12歌との類似性からす

いる。韻律上も、*iambic tetrameter catalectic* の第2, 3, 4, 6, 7脚ではほぼ常に *iambos* が保たれ、*spondee* の形になる脚は第1脚(3, 4, 5, 7, 9, 13行)と第5脚(5, 11[*conscribilent flagella* と読む場合], 13行)および *flagella conscribillent* と読む場合の11行目の第7脚のみで、*resolution* は一切ないなど非常に規則的である。さらに、第1, 4行ではすべての単語の *accent* が *ictus* と一致し、また多くの行の前半には *cretic* の形の語が規則的に現れる(1 *mollior*, 2 *anseris*, 3 *languido*, 4 *turbida*, 6 *pallium*, 7 *Saetabum*, 9 *unguibus*, 10 *laneum*, 11 *turpiter*, 12 *aestues*) などの特徴が指摘されている(*Julia W. Loomis, Studies in Catullan Verse; An Analysis of Word Types and Patterns in the Polymetra*, Leiden, Brill 1972 [*Mnemosyne Suppl.* 24], 144)。

- (2) *cum* の従属節中において、過去の一時点を指す完了または歴史的現在については、cf. K-S II. 335-6、また反復的・習慣的行動を指す現在または完了については、cf. *ibid.* II. 337. 4.

ると、そう解するのが妥当なのではないか⁽³⁾。

このように第 25 歌は解釈上やや不明確な点を含むが、全体的な趣旨としては普段は mollis でありながら何らかの機会があると突如 rapax になって盗みを働き、しかも盗品を臆面もなく見せびらかす癖のあるタッルスに対して、詩人が今回の盗みは許せぬとして盗品の返還を要求している詩と解せるだろう。その中で、問題の 5 行目では直前の 4 行目でタッルスが rapacior でもあると言われたのを受けて、彼がその rapax という性質を示すのは通常どういう場合かを語る文脈だと理解できる。行の後半の ostendit oscitantes「欠伸して(注意散漫になって)いる者たちを指し示す」という詩句からして、大まかな意味としては何らかのきっかけが人々の油断している様子をタッルスに教え示す(タッルスが周囲の油断につけ込んで盗みを働くチャンスを得る)ということのようである。問題の個所で写本の伝える字句はおそらく mulier- と読める字句の後には G R 写本が複数の異なる読みを併記しているように、筆写者にとって判読困難な文字しか伝えられていなかったことを窺わせる。韻律上も当てはまらない文字列であり、異なる推測を併記したものに過ぎない。最初の mulier- の部分も O 写本から窺われるとおり、略記法を用いた字句からの復元であり、疑いなしとししない。これまで、この写本伝承からは mulierarios, mulier(um), munerarios, num(m)ularios, balnearios, vestiarios など様々な語が復元されているが、必ずしも納得の行くものとは言えない。例えば、mulierarios, mulier(um) では muli- の部分が resolution を起こす点で韻律上特殊な箇所になってしまう。munerarios, num(m)ularios, balnearios, vestiarios などは宴会であったり、両替所(または貨幣検査所)であったり、風呂場や脱衣場(cf. 33. 1)であったり、タッルスの盗みの現場をどう捉えるかで工夫された読みだが、大方の賛同を得るには至っていない。また冒頭の diva についても、diva mulierum と読む場合や luna と修正する提案を含めて、月明かりの晩を想定したり、また laeva に置き換える提案もある。あるいはまた、ostendit を offendit など他の動詞に読み換えるなどの提案もなされている。そこで、従来の読みの幾つかについて個々に概観しておくことにしたい。主な提案を列挙しておこう⁽⁴⁾。

-
- (3) 第 12 歌のマッルキーヌス・アシヌスの盗みの場合も、12. 12-16 に語られるように(cf. 9, 28. 3, 47. 3)、詩人の親友たちの土産の品として大切だからタオル(11 lintheum = 14 sudaria Saetaba)を返せ、と言われており、この第 25 歌でもそれと同じ 7 sudarium ... Saetabum が言及されているところから、同じ解釈が成り立ちうる。7 catagraphos ... Thynos も詩人自身がビーテューニアから持ち帰った土産の品とも考えられるので(cf. 10. 7, 18-20, 28-31, 31. 5-6; cf. 46. 4ff., Cinna fr. 11)、同様に考えられよう。
- (4) 以下の諸提案については、各種校訂本、注釈書、翻訳書に加えて、以下の論文による：D.A. Slater, *CR* 19 (1905) 59; O.L. Richmond, *CQ* 13 (1919) 134-5; R. Herzog, *Hermes* 71 (1936) 341-3; J. Colin, *REL* 32 (1954) 106-10; M.C.J. Putnam, *CP* 59 (1964) 268-70; P. Oksala, *Adnotationes Criticae ad Catulli Carmina*, Helsinki 1965, 32-5; L.A. MacKay, *CP* 61 (1966) 110-1; F.O. Copley, *Latomus* 35 (1976) 416-8; T.D. Papanghelis, *Latomus* 39 (1980) 409-11; J. Granarolo, *Latomus* 400 (1981) 571-9.

- (1) cum luna munerarios ostendit oscitantes *Lachmann*
 (2) cum laeva munerarios offendit oscitantes *Ellis*
- (3) cum diva numularios ostendit oscitantes *Slater*
 (4) cum laeva nummularios offendit oscitantes *Thomson*
- (5) cum diva Murcia aridos ostendit oscitantes *Putnam*
 (6) cum diva Murcia arbitros ostendit oscitantes *MacKay, Quinn*
- (7) conviva cum ebriosior se tendit oscitanter *Papanghelis*
 (8) conviva cum mero gravis se ostendit oscitantem *Boehmius*
- (9) cum dives arca rimulas ostendit oscitantes *Skutsch, Goold*
- (10) cum diva mulier alites ostendit oscitantes *Vuertheim, Wuensch, Ferrero, Copley*
- (11) cum diva mulierarios intendit oscitantes *Colin*
 (12) cum diva mulierarios tetendit oscitantes *Herzog*
 (13) cum laeva mulierarios offendit oscitantes *Granarolo*
- (14) cum diva mulierum arias ostendit oscitantes *Oksala*
- (15) cum diva miluorum aves ostendit oscitantes *Palmer, Lee*
 (16) cum diva, milue, areis ostendit oscitantes *Richmond*

まず、Lachmann (1) が提案し Ellis (2) も認める munerarios は、通常は「催し物の提供者」の意味であるこの語を、ここでは「贈り物を(仕方なしにまたは盗まれることで)与える人」の意味に取らねばならない点で問題がある⁽⁵⁾。また Lachmann は Heyse が提案する luna を採用して、宴会の月明かりの状況を想定するが、これは diva の不明確性を修正するものではあるが写本の読みとの隔たりが大きい。他方 Ellis (2) は、12. 1 manu sinistra に基づき、同じ 12. 3 neglegentiorum とここの oscitantes の対応も考慮して、diva を laeva 「盗みを働く左手」と読み換え、ostendit も offendit 「偶然出会う」に置き換える B. Guarinus の修正案を採用する。だが、盗みのきっかけが単なる偶然というのは誹謗中傷としての攻撃性に欠けるのではないか(しかし、この laeva ... offendit という修正提案は、後に Granarolo (13) が mulierarios という読みと、また Thomson (4) は次に見る nummularios という読みと組み合わせる形で採用している)。Slater (3) が提案し、最近の Thomson (4) も認める num(m)ularios は、Ellis が指摘する碑文資料 (Orelli

(5) OLD s.v. munerarius: 'A giver of gladiatorial or other public shows'; 'munerarius est qui munera dat vel invitus et oscitanti rapta' (Lachmann).

Inscript. 4266) に C. Iulius Thallus という *superpositus numulariorum* の存在が確認できることから、この詩のタッルスも何らかの両替業務か貨幣検査の役人⁽⁶⁾と関わりがある人物と考えられるので、単なるこそ泥ではなく貨幣検査所か両替所からも金を盗むような本格的な盗人と見なす読みである。しかし、そのような本格的な盗人であることと、詩人の外套やタオルなどを盗むこととはむしろ逆に整合しないように思われる。Putnam (5) および MacKay (6) らの *diva Murcia* と読む提案では怠惰・倦怠の女神がその(おそらく宴会の)場にいる人々の不注意ぶりをタッルスに教え示すということになるが、どうしてタッルスがこの女神の加護を受けているのか、あるいは特にタッルスがこの女神の影響を受けた人々の様子を察知するという理由がはっきりしない(タッルス自身が怠惰・倦怠の女神に帰依しているのなら、こと盗みの場合には逆に「嵐よりも略奪的」になるというのも奇妙ではないか)。また、Putnam の *aridos* は喉が渇いて酒が飲みたくてうずうずしているので注意散漫になっている人々という解釈だが、MacKay も批判するように、実際にはすでに宴会の酒に浸っているのだから *aridos* とは「さっきまで渇いていた人々」ということになり、不自然である。その MacKay の *arbitros* もやや恣意的な埋め合わせの感を否めない。また Papanghelis (7) は *conviva cum ebriosior se tendit oscitanter* と、かなり大胆に字句を改変して宴会で酔って注意散漫になっているという(これも 12. 2-3 *in ioco atque vino / tollis linthea neglegentiorum* に対応する)状況を読もうとする提案を行い、Boehmius (8) の読みもそれと類似の状況を想定したもののだが、写本との隔たりが大きすぎるように思われる⁽⁷⁾。Skutsch (9) が提案し、Goold も採用する *dives arca rimulas* 「金庫が口を開けている」というのも再現状況としてはともかく、やはり写本との相違が大きい。

次に、写本の読みに基づいて *mulier* の変化形またはその派生語を採用する読みのうち、まず Vuertheim (10) らの *cum diva mulier alites ...* は、予知能力のある女性が鳥占いの鳥 *alites* の様子を指摘したとき、つまり直前の4行目で言及された *procella* を予告したとき、と解する読みだが⁽⁸⁾、これも(Granarolo が批判するとおりに)「予言の力を持つ」の意味は *diva* ではなく *divina* の語で表されるので、無理がある。

それに対して Colin (11) は *mulierarios* と読む Haupt の読みを採用する(この読みはそれ以前にも Friedrich と Herzog (12) により、また後には Granarolo (13) によって採用されている)。この場合 *mulierarios* とは *Isid. Orig.* 10. 107 *feminis dediti, quod antiqui mulierarios nominabant* に基づいて「女たらし、女好き」の好色漢と解することになるが、Colin はこの行の *diva* をカトウツルスの他の個所で

(6) *OLD* s.v. *numularius*: 'a kind of small-scale state banker (employed esp. to change foreign currency or test coins).'

(7) Baehrens の提案する *cum dira vinulentias ostendit oscitantes* も場面状況は同様だが、同じ批判が当てはまるだろう。

(8) このように5 *cum* 節を4 *rapacior* とではなく、*turbida ... procella* と結びつけて、嵐が近づく時点を語る従属節と取る見方に基づく提案は古くは少なくなかった：例えば *dira maris hiems aves* (B. Guarinus), *diva mater alites ostendit occinentes* (Statius), *de via mulier aves ostendit oscitantes* (Scaliger) などほみな、嵐を予告する鳥や女予言者を読み込もうとする提案である。

も見られるように Venus を指す (Catull. 64. 373-4, 66. 64, 89) と捉えて興味深い読みと解釈を提案している。即ち、cum diva mulierarios intendit oscitantes と修正することにより、mulierarios 「女たらし、女好き」の男どもが愛の女神 (diva = Venus) の力によって性的興奮状態になり相手の要求を飲まざるを得なくなっている時、と解する。タッルスは相手のその状態につけ込んで贈り物を要求するため、詩人もそうした男の一人として仕方なしに贈り物をしてしまったが、性欲を満たした後になって心変わりをして、いったん与えた贈り物の返還を要求している詩なのだと解釈するのである (そしてこれと類似の状況を語る詩として Mart. 11. 58 を引く)。この理解では 8 palam soles habere が説明しやすくなるという。それは、盗品ならば常日頃堂々と見せびらかすはずもないが、形の上だけでも贈り物としてもらったものならそれができるはずだ、ということであろう。しかし、この解釈にもいくつか難点がある。(1) タッルススの mollitia と rapacitas の対比が軸になるはずだが、この解釈ではその2つが対比されるというよりもタッルスはいわばその陰間としての mollitia を武器に、色仕掛けで男から贈り物を無理矢理要求して奪い取る、ということになる。そのことが果たして 4 idemque によって強調されている対比とうまく整合するだろうか。しかも、この後の 6 involasti や 9 tuis ab unguibus のような猛禽類をイメージさせる表現と (それが仮に比喻だとしても) 色仕掛けという解釈とがうまく整合するだろうか。(2) mulierarios 「女たらし、女好き」の対象にはタッルスのような陰間も含まれるのか。タッルススの mollitia は確かに彼の女役としてのあり方に由来するし、詩人自身にも同性愛の傾向があることは他の詩からも明らかだが、しかし、わざわざ mulierarios という言葉でタッルスを手にしたがる同性愛の男たちが語られるのには疑問がある (つまり、mulierarius という言葉を文字どおり「女好き」というだけでなく、同性愛をも含む好色漢を指す言葉と理解しなければならなくなる)。また、もしも mulierarios ... oscitantes と読むなら、それはむしろタッルスのような陰間は無視して他の女に気を取られているからタッルスがその不注意につけ込んで盗みを働く隙ができると解すべきではないか。その点では Herzog (12) の提案する cum diva mulierarios tetendit oscitantes の方が、女好きの男どもが「女神」即ちレスビアに見とれて性的に興奮しているという状況を語る読みとして理解しやすい。ただし、この提案自体も diva = Lesbia (cf. 68. 70) と解するなど疑問が残る。(3) intendit (oscitantes) という修正読みも問題だが、oscitantes という語は、多くの場合安心や気の緩み、疲れや怠慢で不注意になっていることを指す言葉なので⁽⁹⁾、性欲を刺激されて夢中になって (他に気が回らなくなつて) いるというのとは違うであろう。同じ批判は Herzog の提案にも当てはまる。(4) Catull. 15, 21, 40 などのように、この詩と同様に相手への報復を予告する詩では、最後に脅し文句として告げられる処罰は、相手が犯した罪に対応するものであり、Colin 自身も引く Mart. 11. 58 はまさにそうした処罰として、相手のお釜を掘るぞというごく卑猥な脅し文句に終わっているのだが、この詩の結末はそ

(9) Cf. Donatus ad Ter. *Andr.* 181 (amoto metu interea oscitantes opprimi): est animi otium et securitas ... oscitantes securi vel nihil providentes; *TLL* s.v. 1104. 15ff. '(oscitatio est maxime signum *fatigationis, languoris, neglegentiae, unde fortasse hic illic transit in ipsam notionem nihil curandi sim.*)'.

れとは異なる。つまり、色仕掛けで無理矢理贈り物をせしめられた詩人が返還を要求して脅すのが奴隷か盗人そのものに対する処罰である鞭打ちというのは奇妙である。あるいは *flagella* は性的な処罰を比喩的に表現したものと取れないことはないかもしれないが、やはり無理がある。もしも *flagella* が性的な処罰だとすると、詩人は性欲を満たした後になって贈り物の返還を求め、再び性的な行為を今度は処罰として使おうとしていることになる。(5) もう一つは、Colin の理解では詩人は性欲を満たした後になって気が変わって贈り物の返還を求めていることになるが、その理解は *quae nunc ... reglutina et remitte* の説明にはなっても、*quae palam soles habere ...* とはむしろ整合しなくなるように思われる。結局、*mulierarios* との読みも納得の行く解釈には必ずしも繋がらない。

他方、Oksala (14) は *diva mulierum arias ostendit oscitantes* と読み、その *diva mulierum* 「女たちの女神」とは *Diana = luna* を指すものと捉え、また *aria* (= *area*) とは '*vultus lunae*' vel '*corona lunae*' の意だと解する。そして、*arias ... oscitantes* とは月が満面の笑みを見せる、つまり満月を意味するとして、この一節ではタッルスが満月の夜に *lunaticus* となって盗みを働くことが語られているものとする。だがこの解釈では、果たして *arias ... oscitantes* が Oksala が想定するような意味に理解できるかどうか疑問である。しかし、*diva* に *mulierum* という限定がつくことで「女神」がある程度特定されうる点では評価できよう。

そこで、仮に *diva mulierum* (= *Diana = luna*) という読みを採用するとすれば、そのあとに続く語としては、(やや写本からは遠ざかるが) *canes*, *ebrios*, *arculas* などが考えられるのではないか。

(17) *cum diva mulierum canes ostendit oscitantes*

(18) *cum diva mulierum ebrios ostendit oscitantes*

(19) *cum diva mulierum arculas ostendit oscitantes*

これらはそれぞれ、月明かりによってタッルスが見出す盗みのチャンスとして、「番犬」「酔客」が不注意になっている場合や「衣装箱が口を開けている」状況を想定するものである。*canes* ならば、単純に盗みの好機となる番犬の油断を語ることになる。他方、*ebrios* と *arculas* はともに *cretic* の語で、この詩では行の前半にこの形の語が来る場合が多いという事実⁽¹⁰⁾に当てはまる。 *arculas* の場合にはまたこの詩の冒頭から続く指小辞語の連続を続けることになる点も意味があるかもしれない。もし *ebrios* と読めば、宴会の参加者たちが酔ってぼんやりしている、という第 12 歌と同様の状況が再現されることになる。それに対して、*arculas* はここでは衣装箱を指し⁽¹¹⁾、従って *oscitantes* も、*os-citare* 「口を開けている」というこの語本来の意味に解することになる。先に触れた Skutsch (9) らの *dives arca rimulas ostendit oscitantes* という読みも、場面状況と *oscitantes* の意味としては類似しているが、写本の伝える文字列にはむしろ *arculas* の方が近いであろうし、また直後に言及されるように詩人がタッルスに盗まれたものが複数の衣服や布製の小物であ

(10) 上記注 (1) 末尾参照。

(11) *OLD* s.v. はこの語の「衣装箱」の用例として *Cic. Off.* 2. 25, *Sen. Ep.* 92. 13, *Mart.* 2. 46. 4 を挙げている。

るとすれば、通常金庫を指す *arca* ではなく、*arculas* の方がありそうな読みだと言えよう。つまり、第 12 歌の場合のように、たまたま宴会の場に置かれていたただ一種類の *linteum* = *sudaria* だけではなく、*pallium*, *sudarium*, *catagraphos* という三種類の異なる布製品が盗まれたということは、それらが別々の機会にではなく「衣装箱」から一度にまとめて盗まれたという状況が語られていると想定されるからである。

だが、これらよりもなおいっそう考慮に値する読みとしては

(20) *cum diva mulierum mares ostendit oscitantes*

の可能性が考えられる。*mares* と読めば、*cinaedus* であるタッルスがその「女役」としての立場によって *diva mulierum* 「女たちの女神」 (= *Diana* / *luna* またはいずれか他の女神か) の加護を受けて男どもの隙をついて盗みをする、という事情が読み取れよう。そこに男女たる *cinaedus* をめぐる機知を認めうるだろう。*mulierum* と *mares* という alliteration をなす反義語が隣接する点も効果的である。カトゥッルスは *cinaedus* という語を多くの場合男色の女役の男を意味する言葉として軽蔑的に用いており (16. 2, 29. 5, 9 *cinaede Romule*, 33. 2, 57. 1, 10)、とりわけ第 16 歌は 2 *Aureli pathice et cinaede Furi* と呼びかけて、彼らのお釜を掘り *fellatio* を強制してやるぞと脅す誹謗詩であり、その最後から 2 行目では (いま挙げた 2 行目の呼びかけと呼応するように、また同じく *m* の alliteration を伴う形で) 13 *male me marem putastis?* と言い、続く最終行では冒頭第 1 行目の *pedicabo ego vos et irrumabo* を繰り返すことで、自らの男性性を強調している。この第 25 歌でもタッルスの女性性がその *mollitia* として強調されるのはもちろん、特に 3 行目の「年寄りの萎びた一物」よりも柔らかい、という比較が、彼の「男らしさ」の欠如を如実に物語っている。従って、*cinaedus* と *mas* / *mares* とは対極にある言葉だと言えよう。とすれば、この第 25 歌ではタッルスが男でありながら *cinaedus* であるがゆえに「女たちの女神」の加護を受けて、こともあろうに純然たる男たち *mares* の油断につけ込んで盗みを働くことに対して詩人は非難を向けているのだと想定することができる。そしてだからこそ、詩人は後半ではタッルスのこの盗みに対して男らしい厳しい処罰を脅しとして告げているのだ、と解せるように思われる。つまり、その処罰とはタッルスの女性性の象徴である「柔肌」への鞭打ちであり、また「嵐よりも略奪的」という比喩で「嵐」に準えられたタッルスが、今度はその処罰によって逆に嵐に翻弄される小舟のように身悶えることになる、というわけだからである。そう考えると、ここに *mares* の語を読めば詩全体の趣旨との整合性が説明できるように思われる。

しかし、やはり *mulier-* には韻律上 *resolution* を認めざるを得ないという大きな難点がある (*muljer-* と *scan* することにも疑問がある)。この詩では他には一切そのような箇所がないことを考えると、ここにだけ例外を認めることは困難だと言わざるを得ない。

そこで、第 5 行目に関する様々な修正提案のうちで、タッルスの *rapacitas* が先にも触れた猛禽類のイメージで語られていることに注目するならば、問題の箇所に *miluus* 「鷹」の語 (またはその派生語) を読もうとする提案には見るべきものがある

るように思われる。というのは、miluus (形容詞形 miluinus) という鳥はしばしば貪欲さや略奪欲あるいは盗み (rapax, rapacitas) によって特徴づけられ、その鉤爪や視力の鋭さなども格言的に語られる鳥だからである⁽¹²⁾。また女性をその貪欲さのゆえに milvinum genus (Petr. 42. 7) と言ったり、milva (id. 75. 6) と呼ぶ例などもある。Plaut. *Men.* 212 quae mi ... miluinam (sc. famem) suggerant に見られるように、miluina という語が famem 「飢え」を含意する名詞として用いられた例もある。さらに、特に注目すべきは、イシドールスの伝える語源説である。それによれば、milvus という言葉は mollis avis を語源とするという (Isid. *Orig.* 12. 7. 58 milvus mollis et viribus et volatu, quasi mollis avis, unde et nuncupatus)。従って、miluus とはまさにタッルス自身と同じく、mollis と rapax という 2 つの一見相反する性質を持つ鳥として意識されていた可能性がある。カトゥッルス自身もそのような語源説を知っていたと断言することはできないが、こうした通俗語源説も含めて一般に語源への関心が高いことを考えると、そのような含みが前提にされていることも十分にありうると思われる。とすれば、この第 25 歌でもタッルスを miluus に準えることでまさに彼の mollitia と rapacitas が比喩的に表現されていると想定することは不可能ではない。

そうした提案の一つが Palmer (15) が提唱し Lee も採用する diva miluorum aves である。この場合、diva miluorum は盗みの女神 Laverna⁽¹³⁾ を指すものと考えられている。また aves とは miluus の餌食となる鳥一般を指し、ここでは比喩的に盗みの被害者を表すことになるだろう。冒頭からの比較でも様々な動物 (の身体の部分など) が言及されていたこととも、ここでの鳥たちの比喩はうまく繋がると言える。だが、何故ここで突然に盗みの女神が diva miluorum 「鷲たちの女神」として登場し、「鳥どもの油断を指し示す」即ちタッルスに盗みの好機を教える、とされるのか、その根拠が不明確であり、この女神がタッルスを支援する (タッルスがこの女神の加護を受けている) 理由も判然としない。あるいは上記の語源説に依拠しているとしても、「女神」の導入はやはり唐突である。また、Richmond (16) が提案する diva, milue, areis では、タッルスに「鷲よ」と呼びかけることになるが、これには 83. 3 mule, nihil sentis? という類似例があるので、可能性があるかもしれない。またこの場合には、1 cinaede Thalle と、直前の 4 idemque, Thalle という呼びかけに続いて、韻律上同じ位置で cum diva, milue と呼びかけることになるのも効果的だと言えよう。しかしこの読みでは、diva と areis が何を指すのか理解しにくい。Richmond によれば diva は盗みを司る女神、areis は詩人が 3 つの品物を盗まれる現場を指す Campus Martius の運動場 (Hor. *Carm.* 1. 9. 18 Campus et areae) を指す語だとして、タッルスが詩人の 3 種類の布製品を盗み取ったのはこ

(12) Otto, *Sprichw.*, s.v. milvus (milvinus); その rapacitas については、cf. *TLL* s.v. 986. 8ff. (e.g. Mart. 9. 54. 10 rapax milvus); また比喩的には *ibid.* 986. 54ff. (e.g. Plaut. *Poen.* 1292). なお、韻律的には Plautus, Terentius から Horatius, Ovidius, Persius など、この語を 2 音節語 (milvus) ではなく 3 音節語 (miluus) として扱う例がほとんどで (*TLL* s.v. 985. 45ff.)、カトゥッルスもまた同様であった可能性が高い。

(13) *OLD* s.v. Laverna: 'A goddess of thieves'; cf. Plaut. *Aul.* 445 ita me amet Laverna, fr. 63 mihi Laverna in furtis celebrassit manus, Hor. *Epist.* 1. 16. 60 pulchra Laverna, da mihi fallere.

の運動場だったのだと解する。しかし、前後の脈絡もなく特に何らの限定もなしに *diva* と *areis* をそのように理解するのはやはり困難であろう。

このように、従来この鳥の名を読み込んだ提案自体には問題があった。そこで、これらの提案を参考に、別の可能性を考えるならば、*diva* が名詞の属格形を伴うのではなく、むしろ形容詞を伴う場合が考えられるのではないか。即ち

(21) cum *diva miluina* aves ostendit oscitantes

あるいは *aves* の代わりに *nos* と読んで、

(22) cum *diva miluina nos* ostendit oscitantes

と読む可能性が考慮できよう⁽¹⁴⁾。*miluina* という形容詞を伴う形であれば「鳶の(ような)女神」という言葉で鳶のように略奪や盗みを司る女神のことをも指しうるであろうし、その女神が「指し示す」という言葉で、タッルス自身もこの女神の加護を受けた略奪者として人々の不注意ぶりを鋭く見て取るという「鳶」のような目敏さを備えていることが語られ、これがこの後の 6 *involasti* や 9 *unguibus* へと繋がってゆくと説明できよう。また、*aves* を *nos* と読み換える場合には、*nos ... oscitantes* 「我々が不注意になっている」という言葉が語られることで、タッルスによる盗みの被害に遭うのが詩人を含めた仲間たちであることが示唆され、第 12 歌の 2-3 *in ioco atque vino / tollis linthea neglegentiorum* と類似の状況(仲間内の宴会の場面)が描かれていることになろう。それはさらに、先にも見た *soles* の解釈(タッルスは詩人の持ち物に限らず、仲間たちの品物を奪い取ってしかも平然と見せびらかすのを常としている、という解釈)とも整合するであろう。また、*diva miluina* の *homoeoteleuton* や、*nos ostendit oscitantes* における *-os/os-* の繰り返しも、この詩の音の効果に合致すると言えよう。

しかもこれに加えて、さらに重要な点は、すでに触れたようにプラウトゥスには *miluina* を名詞化して *fames* の意で用いた例があることからすると、*diva miluina* とは(略奪や盗みの女神というだけでなく)盗みを促す原因となる「飢え」を擬人化して女神として語った表現だとも考えられることである。この関連で注目されるのは、カトゥッルススにおいてはしばしば「飢え」が誹謗中傷の表現として語られ、特に「盗み」との関連で言及される場合があることである。例えば、21. 1 *Aureli, pater esuritionum, / ..., 10-11*; 23. 1-2 *Furi, cui neque servus est neque arca / nec cimex neque araneus neque ignis, / ..., 14 sole et frigore et esuritione*; 24. 5-10 など。とりわけ、*fames* という言葉をカトゥッルススは 28. 5 *frigoraque et famem*, 47. 2 でともにピーソーの仲間との関わりで用いており、特に 47. 2 *scabies famisque mundi* では、ピーソーの幕僚の *Porcius* と *Socration* (= *Philodemus*?) なる人物を *duae sinistrae* と呼んだ直後にこの言葉を侮辱的な呼びかけとして用いている。つまり、12. 1 *manu sinistra* でも示唆された「盗み」を働く「左手」と「飢え」とは密接に結びつくのである。言い換えれば、「左手」という、盗みを働く手と呼ばれた人物が、同時に「世の飢え」とも呼ばれているわけ

(14) 注(12)で触れたことから明らかなように、この場合の *miluina* は 4 音節語(~~~~)である。

だから、「飢え」とは「盗み」を促す欲望あるいは略奪欲を指す言葉と解される⁽¹⁵⁾。とすれば、ここでも「鳶のような飢え（略奪欲）」がタッルスに盗みを促す原因とされていることは十分に考えられよう⁽¹⁶⁾。また、この第 25 歌と同じ iambos の韻律 (iambic trimeter) を用いた第 29 歌には、29. 15 *quid est alid sinistra liberalitas?* という表現がある。ここでは側近のマームツラの奢侈を大目に見るカエサルの「気前の良さ」を糾弾するのに、*liberalitas* に *sinistra* という「盗み」と縁の深い語を組み合わせている。そしてこの直前ではカエサル自身が *vorax* (10) と呼ばれ、マームツラの所業についても「食らい尽くす」(*comesset* 14) という言葉が用いられており、盗みが即ち「飢え」に起因する「大食らい」と結びつけられていることが注目される。

従って、*cum diva miluina nos [vel aves] ostendit oscitantes* という読みは、盗みの女神のことを「鳶たちの女神」と呼ぶのではなく、タッルスの略奪欲を「鳶のような飢え」として擬人化して、女神と称した表現だと考えられる。ここでは「鳶」が単に盗みや略奪と密接に結びつくだけでなく、誹謗詩で繰り返される「飢え」をも含意する鳥であることが重要である。それによって、この詩句はタッルスが明確な理由もなく盗みの女神の加護を受けている、というのではなく、彼自身が「鳶のような飢え」即ち激しい略奪欲・盗癖を持っていて、それがあたかも女神のように彼に盗みの好機を察知させる、という事情を語る詩句となっている、と考えられる⁽¹⁷⁾。

(首都大学東京)

(15) Cf. Fordyce ad 47. 1 (*duae sinstrae*): They do his [sc. the governor's] thievings for him, the left hand's work; id. ad 47. 2: *scabies fames mundi* is most naturally taken to mean 'itching greed whose object is the *mundus*'.

(16) なお、33. 1-3 *O furum optime balneariorum / Vibenni pater et cinaede fili / (nam dextra pater inquinatio, / culo filius est voracior)* では父親の盗みと陰間の息子の組み合わせが誹謗の対象とされている点で、この第 25 歌との関連からも興味深い。

(17) この関連から、さらには

(23) *cum dira miluina nos [vel aves] ostendit oscitantes*

という読みさえ考慮できるかもしれない。この場合にはもはや略奪や盗みの女神といった漠然たる存在を想定するのではなく、むしろ「(鳶のような)おぞましい飢え」そのものがタッルスに人々の不注意ぶりを気づかせる、つまり、タッルスはその「飢え(略奪欲)」に駆られて鳶のような目敏さで人々の隙を察知して略奪する、ということが語られていると考えられる。あるいは、そのような「おぞましい飢え」そのものが「女神」と明言されこそしないけれども)盗みの好機を目敏く気付かせる女神のような力を持つものとして、いわば擬人化されて「人々の油断を教え示す」と言われているのかもしれない。「飢え」という言葉に付される修飾語として *dira* はふさわしい形容詞であり、実際に *dira fames* という表現はウェルギリウスやオウィディウスにも見られる: Verg. *Aen.* 3. 256, Ov. *Met.* 8. 845, 11. 371 (ちなみに、Ov. *Met.* 8. 784-822 には実際に *Fames* の女神が豊饒の女神 *Ceres* の対極の存在として登場することにも注目すべきであろう)。また「飢え(略奪欲)」が「指し示す」といった表現もカトウッルスに何度か見られる擬人化的な語法からすればあり得ないことではない。つまり、カトウッルスは人間や生物ではなく、このように事物や人間の感情とか状況をいわば擬人化して表現する場合が少なくない。例えば、第 66 歌の *coma Berenices* が語る詩や第 4 歌の *phaselus* を擬人化した詩でもそうだが、他に例えば 3. 13-5, 6. 7-11, 7. 7-8, 12, 15. 14-5, 17. 21, 44. 8-9, 16-7, 63.

78, 64. 88, 284, 65. 1 などが挙げられよう。特に 15. 14-5 quod si te mala mens furorque vecors / in tantam impulerit, scelestae, culpam や 44. 8-9 quam (sc. tussim) mihi meus venter, / dum sumptuosas appeto, dedit, cenas などは、人間の内面の狂気や欲望を人間に働きかける存在として語る表現であり、従って *miluina* (= *fames*) *ostendit* も「(鶯のような) 飢えに駆られて目敏く見つける」ことを「飢え(略奪欲)」を主語にして語ったものと理解できよう。しかし他方で、*dira miluina* という表現がプラウトゥスにも現れる「飢え」を指す表現であることが理解されなかったか、*miluina* という語の綴り字上の紛らわしさなどの理由で正しく伝承されなくなったためか、また *dira miluina ... ostendit* という擬人的表現のわかりにくさのせいで、*dira* という形容詞も *ostendit* の主語にふさわしく神格化されて *diva* に代わったということも考えられるかもしれない。しかしながら、伝承を重視するならば、テキストとしてはやはり *diva* と読むべきであろう。